

PIDを中心とした 研究成果情報の流通モデル

武田英明
国立情報学研究所

学術コミュニケーションの変化

- 研究成果の変容："big data"化
 - 規模の拡大：年毎の成果の数は年々増加
 - 多様性の拡大：書籍、雑誌論文、国際会議論文だけでなく、preprint、研究データ、ソフトウェアなど多様化
 - スピード：競争が激しい分野では、年のスケールから月のスケールへ、さらには日のスケールへ

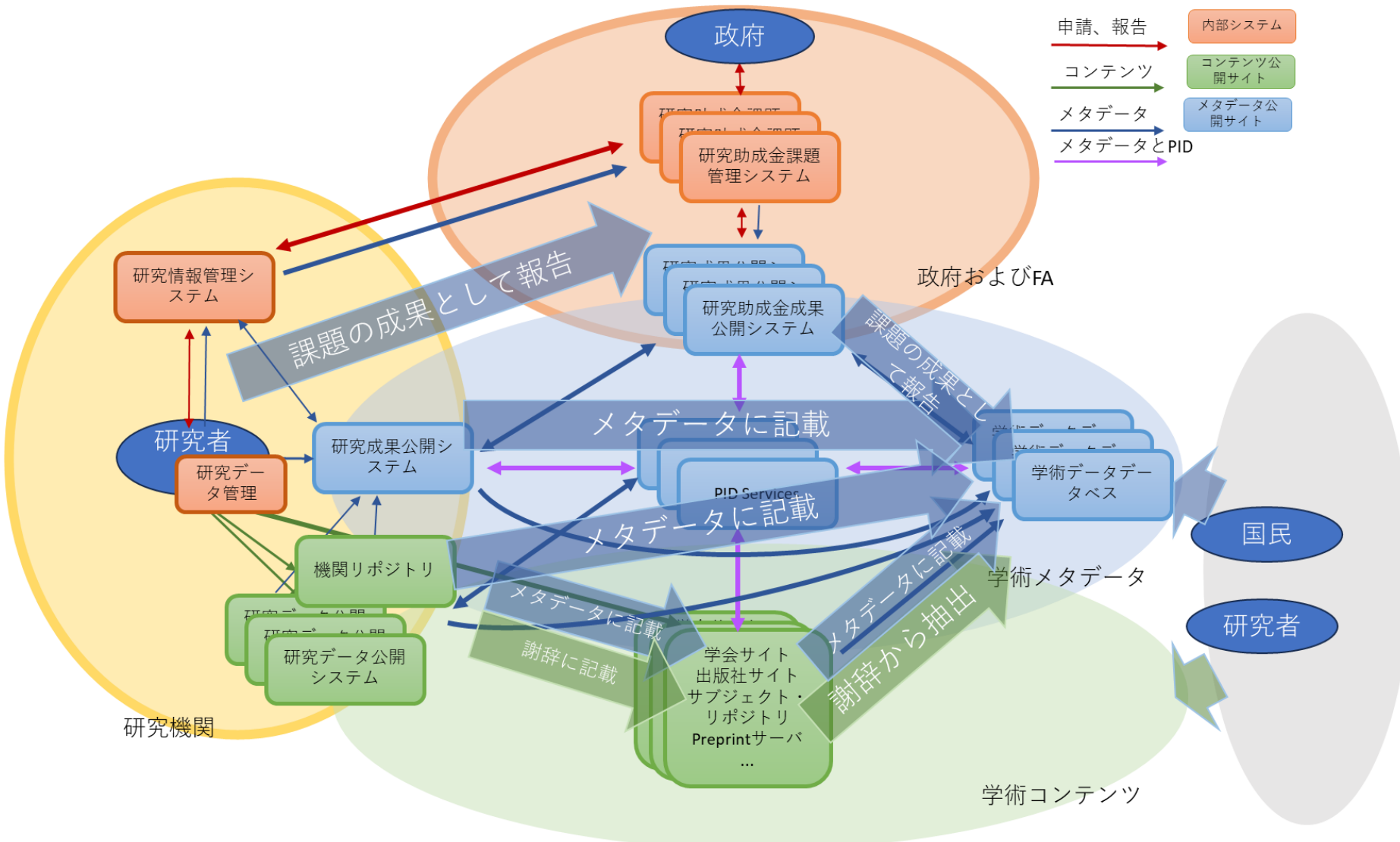
学術コミュニケーションの変化：より多くの要請

- 根拠の提示、再現性の追求
 - 根拠データの公開
 - 関連データやソフトウェアの保存
- 査読の再定義、再定置
 - 査読制度の検証
 - 新しい査読制度の模索
- オーサーシップの再定義、再定置
 - 著者の役割の明示化
 - 著者所属
- 研究資金の明確化
 - 研究の公平性
- 研究組織の役割の再定義、再定置
 - 研究への責任の明確化

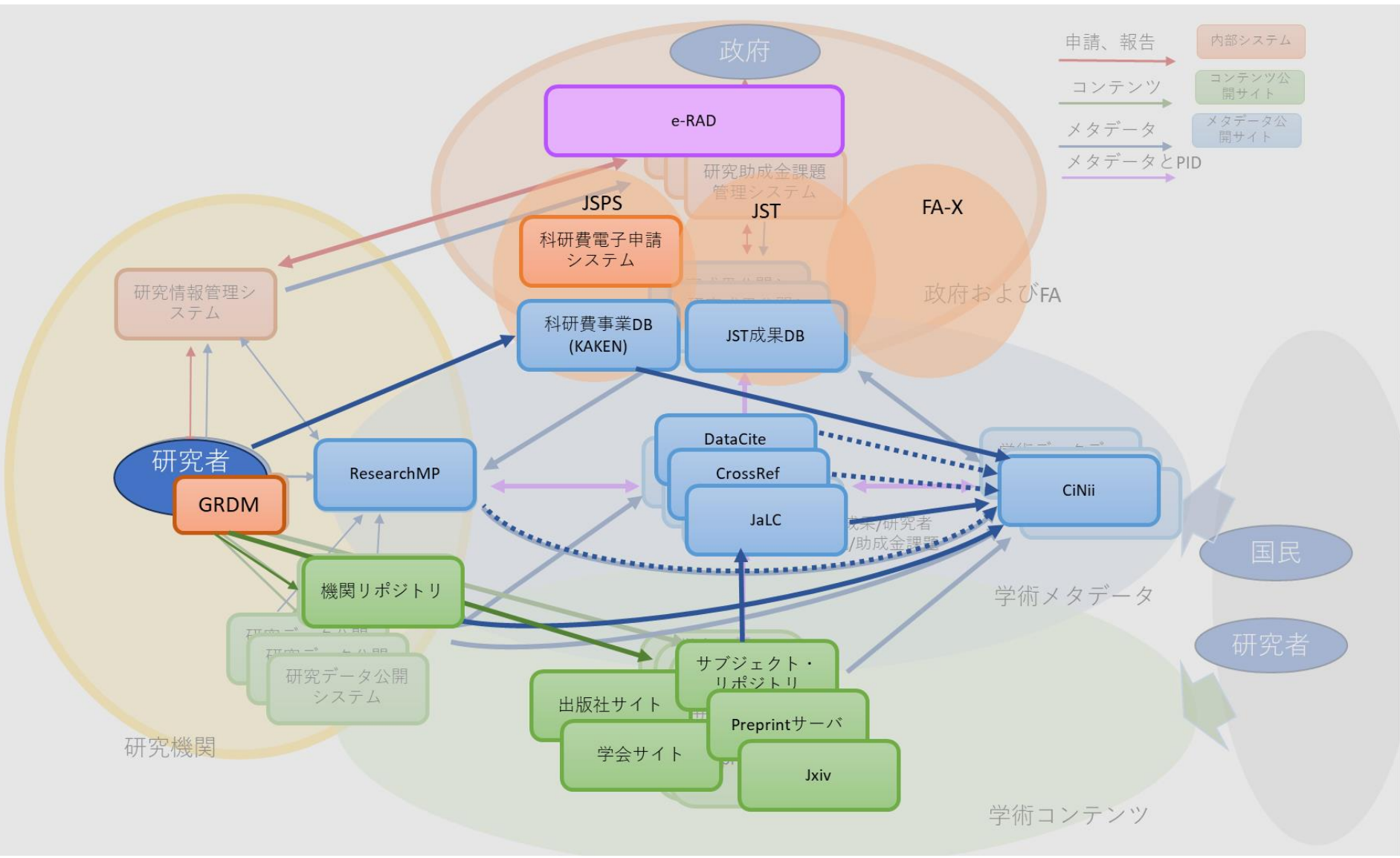
学術コミュニケーションの変化：方向性

- オープン化
 - Citationを含む研究成果情報（メタデータ）は基本的にオープンに
 - 研究成果自身のオープン化
- PID化
 - 大量の研究成果を扱うには必須
 - 研究成果だけでなく、研究者、組織、研究助成金課題なども
- データ利用の高度化
 - 検索から分析、総合へ

研究助成金課題情報の流れ



現在の担い手



今後10年の研究成果情報の流れ

